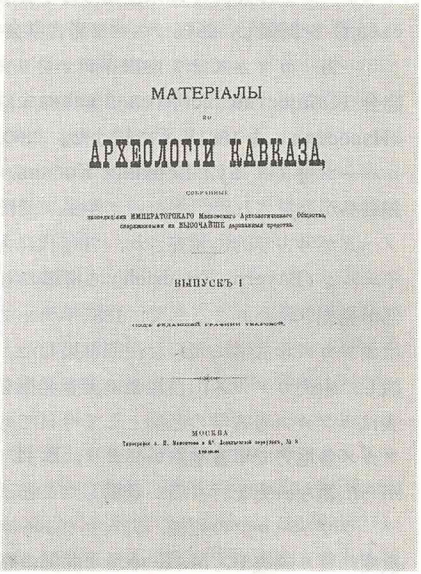
紹介

『カフカズ考古学資料』

雪嶋宏一

I はじめに

昭和54年度早稲田大学図書館は帝国モスクワ考古学会刊『カフカズ考古学資料（Материалы по археологии Кавказа, собранные экспедициями Императорского Московского археологического общества. 以下MAKと略）』第1-14号（1888-1916. 第14号は55年度購入）を購入した〔請求番号 AK 4339（1-14）〕。MAKはすでに我が国でも角田文衛博士により言及されているが[1]，全巻揃っている図書館等をいまだ耳にしていない。本稿をその紹介とする。


МАТЕРІАЛЫ
ПО
АРХЕОЛОГІИ КАВКАЗА,
СОБРАННЫЕ
ЭКСПЕДИЦІЯМИ ИМПЕРАТОРСКАГО Московскаго Археологическаго Общества,
снаряженными на ВЫСОЧАЙШЕ дарованныя средства.
ВЫПУСКЪ I
МОСКВА

第1号表題紙

II 帝国モスクワ考古学会とカフカズ

MAKを刊行した帝国モスクワ考古学会（Императорское Московское археологическое общество）は1864年A.C.ウヴァーロフ（Уваров, Алексей Сергеевич. 1825-1884）とП.С.ウヴァーロヴァ（Уварова, Прасковья Сергеевна. 1840-1924）夫妻の指導のもとに設立された。当時ロシアではバルト3国とオデッサ等で若干の考古学会がすでに活動していた。また，首都ペテルブルグにも1846年帝国ロシア考古学会（Императорское Русское археологическое общество）が創設され，黒海沿岸，中部

ロシア，ペテルブルグ，ノヴゴロドの諸地方をフィールドとしていた。会員にはA. Ф. ブィチコフ(Бычков)，И. И. トルストイ(Толстой)，В. Г. ドルゥジィニン(Дружинин)，Б. В. ファルマコフスキィ(Фармаковский)等がいた。1859年には帝国考古学委員会（Императорская археологическая комиссия）が発足し，全ロシアの考古学の指導機関となった。その機関誌《Отчеты》は1859-1915年までの考古学報告を含み，今日でも重要な資料である。

こうした考古学形成期に発足した帝国モスクワ考古学会は，A. C. ウヴァーロフを会長に，MAK 執筆者や Д. Н. アヌーチン(Анучин, Дмитрий Николаевич. 1843-1945) В. А. ゴロツォフ(Городцов, Василий Алексеевич. 1860-1945)等を会員にして，学会誌として1865年以来ロシア革命前年の1916年まで《Древности. Труды Московского археологического общества》全25巻を継続刊行した。そして研究対象地域を中部ロシアとカフカズに求め，調査発掘を行った。また，A. C. ウヴァーロフは1869年以来全露考古学会議（Всероссийский археологический съезд）を開催し，帝国モスクワ考古学会をその中央機関とした[2)]。

一方，カフカズでは1873年ティフリス（現トビリシ）にカフカズ考古学愛好者協会（Общество любителей кавказской археологии）が誕生し，《Записки》《Известия》を1881年まで続けた。この頃，1869年北オセチアのヴェルフニィ・コバーン村（旧 аул Верхняя Кобань，現 сел. Верхний Кобан）で偶然に青銅製品が発見された。また，グルジアでは1860年代初頭より古代グルジアの首都ムツヘタが考古学的に調査され，70年代に入って，オーストリアの自然科学者 F. バイエルン(Bayern, Friedrich)の指導のもとにムツヘタ北側のサムタヴロ墓地の一部が発掘された。こうして，1881年ティフリスで開催された第5回全露考古学会議はカフカズ考古学に大きな役割を果した。会議に先立つ1879年その準備委員会を組織し，中央カフカズ山岳地帯の調査発掘を行った。会議での議長ウヴァーロフの発表はカフカズ考古学の基礎として今日でも高く評価されている[3)]。これを契期にカフカズ各地方で考古学熱が高まり，В. И. ドルベジェフ(Долбежев)の如き素人ながら広範な研究を行う者が登場したことは見逃せない。

ウヴァーロフの死後，夫人ウヴァーロヴァが学会会長を務め，自らカフカズを数度に亘り調査し，MAK 中最も評価の高い第8号『北カフカズの墓地（Могильник Северного Кавказа)』(1900)を執筆，1902年にはティフリスからカフカズ博物館（現グルジア国立博物館）所蔵資料集『カフカズ博物館コレクション(Коллекции Кавказского музея)』第5巻に「考古学（Археолгия)」を発表した。そして，1901年には彼女の創意で帝国モスクワ考古学会カフカズ支部をティフリスに設置し，《Известия》第1-6号(1904-1921)を刊行した。モスクワの本部はロシア革命期に活動を停止したが，カスカズ支部は1921年まで存続し，ザカフカズィエ考古学の中心として活動した。

カフカズ考古学を推進した帝国モスクワ考古学会は1886年から1910年前後までカフカズを調査した。その報告書が MAK であった。第1号の「編集部より」にはこの調査目的がキリスト教関係諸遺跡，ビザンツ関係美術品，青銅製品等の考古学資料の調査確認研究にあることが述べられている。

以下各巻にわたり，内容を詳述してみる。

III MAK, вып. 1–14.

Вып. I. Миллер, Всеволод Федорович. Терская Область; археологические экскурсии. Москва, А. И. Мамонтов, 1888. v, ii, 134 стр., 26 табл., карта, 36 см.

著者 B. Ф. ミッレル（1848–1913）はオセチア学の父として著名である。1879年以来オセチア語研究を行い，オセチア人の言語・民間伝承・宗教・歴史・民族学の今日的基礎を築いた。主著『オセチア研究（Осетинские этюды, ч. 1–3)』（Москва, 1881–1887）はオセチア学の最も基本的文献として今日でもその価値を失っていない[4]。彼はカフカズを1879, 80, 81, 83, 86年の5回訪れている。最後の1886年の調査報告が本号である。1897年からモスクワのラーザレフスキィ東洋諸言語学院（モスクワ東洋学研究所の前身）の学院長に就任，1911年にはアカデミー会員に選ばれた[5]。

本号は上記のように B. Ф. ミッレルが1886年6－7月ヴラジカフカズ（現北オセチア自治共和国首都オルジョニキゼ）を中心に，東はチェチェン地方南西山岳部，西はカバルダ地方山岳部のバクサン村までの中央カフカズ山岳地帯で行った調査報告である。調査ルートは巻末地図に朱記され，本文も調査ルート順に構成されている。

1–42頁では今日のチェチェノ－イングシ自治共和国南西部山岳地帯のキリスト教会址・石造塔・埋葬址等の調査である。1969年に初めて発掘された Тхаба-Ерды 教会[6]，1975年に発掘された Алби-Ерды 教会[7]が報告されている。埋葬址では，地上式埋葬（каш）と地下式埋葬（石棺墓）とに分類。石造塔を平屋根のものと方錘形屋根に分け，グルジア起源の建築技術であるとしている[8]。

43–69頁は北オセチア南東部山岳地帯のフィアグドン川とキゼリドン川に沿った渓谷でのキリスト教会址・墓地・石造塔の調査である。特に聖域（дзуар）に変化した教会址，サニバ村北の石棺墓群（6基発掘），зäппадз' と呼ばれる地上式埋葬に言及している。また，以前に調査されたツェイ渓谷のレコム寺院，カサリ渓谷の聖ウァステルジ教会に触れている。

70–91頁では北オセチア西部ウルフ川から現カバルディノ－バルカル自治共和国

のバクサン川までの山岳部に残る同様な遺跡を調査。チェゲム川上流の墓地，チェレク川上流のアバエフ家の石造塔，バクサン川右岸の現ブィルィム村近郊の墓地等に言及している。

92–123頁では後2地方調査の結論として，墓地出土の青銅製品をコバーン文化の伝統を引きつぐ中世アラン人に帰属させてしまった。全体を通じオセチアの民間伝承を豊富に織込み別な方面の興味をも引いている。

Е. И. クループノフは結論の誤謬を指摘しつつも，本号がカフカズにおけるスキタイ－カフカズ関係の最初の資料集であるとその意義を認めている[9]。

Вып. II. Сизов, Владимир Ильич. Восточное побережье Черного моря; археологические экскурсии. Москва, А. И. Мамонтов, 1889. 182 стр., 26 фото., 13 табл., 36 см.

著者 В. И. シゾーフ（1840–1904）は A. C. ウヴァーロフ等と共にモスクワ歴史博物館創設に加っている。1881年から死に至るまで同博物館研究員として活躍，特にスラヴ－ロシア考古学研究に従事した。1881–90年モスクワ郊外のディヤコヴォ村のゴロディシチェを発掘，ディヤコヴォ文化の存在を提起した。

シゾーフはカフカズ考古学の専門家ではなかったが，1886年6–8月 Н. В. ニキーチン（Никитин）と共に黒海東岸アブハジアのスフーミまで遺跡確認の調査を行った。

本号1－8頁は，ノヴォロシィスクからスフーミまでの道中の遺跡の記録である。

9–39頁ではスフーミ市でのトレンチ発掘が述べられ，出土資料を13–15世紀に比定，グルジア芸術の影響を指摘している。

40–55頁では古代ギリシア都市ディオスキュロスの位置を確認し，その歴史的変遷を跡付けている。

56–70頁。ノヴォロシォスクへ帰還し，南方ゲレンジィク市までに見られるドルメンの若干を発掘し，新石器時代に比定している[10]。

71–117頁ではノヴォロシィスク北側のツェメッスカヤ盆地，ナトゥハイスカヤ村，ラエフスカヤ村等のクルガンとノガイニカレ・ゴロディシチェの調査が報告されている。

118–173頁は上記ノヴォロシィスク周辺の諸遺跡の考察である。遺跡は「新石器時代」からキプチャクニハン国時代までに渡り，その埋葬儀礼を詳しく述べている[11]。

Вып. III. Христианские памятники; исследования А. М. Павлинова, В. Ф. Миллера и Х. И. Кучук-Иоанесова. Москва, А. И. Мамонтов, 1893. 134 стр., 66 табл., 36 см.

本号は上記3人の著者による3部分からなる。1–91頁の著者 A. M. パヴリノフ(Павлинов, Андрей Михайлов. 1852–？)は建築学を学んだ後，ロシアの美術史資料を収集するためロシア中を旅し，古い修道院やその調度品を記録した。帝国モスクワ考古学会員となってからは古代遺跡の研究を進め，教会建築と古代美術史を専門とした。また，いくつかの博物館をも設計している。

本号1－7頁で彼は1888年の調査旅行の概要を説明している。それによれば，調査ルートは，アブハジアのスフーミから南方のドランダ，その東方モクヴィ，イロリ，10–12世紀創建のベディアの教会，西部グルジアの中心地クタイシの大教会，その近郊のマルトヴィリスキィ修道院，アジャリアではチョロフ川沿いに南下，現トルコ領アルトヴィンまで達し，ママツミンダ，スヴェティ，オピズ，トベティと訪問した。また，アジャリア地方の木造モスク3ヶ所をも紹介している。さらに，アゼルバイジャンの首都バクーまで行き，ティムール朝時代の宮殿址2ヶ所とジュマ寺院を調査した。後者の壁に見られたアラビア語とペルシア語碑文7点の解説も含めている。

彼は調査の結論としてカフカズのキリスト教会建築を①クーポールを有すもの(6－8世紀)②クーポールとバシリカとが合体したもの(10–12世紀)に分類した。なお，イスラム教関係遺跡に論及したのは本号が唯一である。

92–109頁の著者 Х. И. クチュク=イオアネソフ(Кучук-Иоанесов, Христофор Иванович.)はモスクワのラーザレフスキィ東洋諸言語学院教授で，アルメニア語を専門としていた[12]。ここでは古代アルメニア語写本と碑文を扱っている。上記の調査でアルメニア語写本類がもたらされた。サトレル村の教会に保存されていた14, 15, 16世紀にそれぞれ属する3点の福音書写本とそこに含まれていた書き込み，16世紀後半のアハルツィへの教会に残っていた福音書写本，古代アルメニア語資料として価値ある15世紀の写本を解説。さらに，北カフカズ西部の旧マイコープ郡ベロレチィンスカヤ村の古いキリスト教会址で発見された12世紀のアルメニア語碑文をその由来を考証しつつ述べている。

110–136頁。В. Ф. ミッレルはクバーン川上流現カラチャエヴォ－チェルケッス自治州へ1888年墓碑のコピー作成のため旅行した。そして，ゼレンチュク渓谷に残るギリシア文字によるアラン語碑文を研究し，この地方におけるキリスト教徒アラン人の都市の存在に論及している。次に，歴史博物館所蔵の北カフカス起源の人物像等の浮彫をもつギリシア語碑文の刻まれた石柱3点を紹介している。初めの2点に表現された図像をオセチア人の来世信仰の表現とし[13]，最後の1点をそこに刻まれたチェルケス語単語からトルコ要素の混じったチェルケス人に帰属させている。

Вып. IV. Уварова, Прасковья Сергеевна. Христианские памятники. Москва, А. И. Мамонтов, 1894. 197 стр., 61 табл.,

36 см.

著者 П. С. ウヴォーロヴァについてはすでに述べた。

本号は，アブハジア，アジャリア，南西グルジアのアハルツィヘ，クタイシ南方，リオニ川とその支流クヴィリラ川との間のラチャ地方，トビリシ周辺の教会・修道院・要塞・その他建築物の調査報告である。序（1－6頁）において著者はカフカズにおけるキリスト教と土着宗教との融合が教会建築や聖域に表現されており，それが山岳民においてばかりでなく，文化的中心地にさえ見られることを指摘し，キリスト教の土着化に関する問題を提起している。

結論（190-197頁）では，調査した教会の建築術を4期に区分している。つまり，最古期はビザンツに直接従属していた時代で，教会プランは十字形，クーポールを有する。第2期では古いバシリカ形にクーポールが冠せられ，破風の分離が始まっている。第3期のプランは第2期と同様だが，クーポール円蓋胴が高まり，球形クーポールは円錘形に変化した。この時代の寺院は大規模だが装飾が貧弱である。年代は10世紀末から12世紀に比定され，ビザンツからの技術援助でグルジア人が設計している。第4期はグルジア建築の最盛期で，東方的な植物文・編目文装飾が流行し，装飾はしばしば過多になる。13世紀から15世紀初頭に比定され，グルジアのオリジナルである。

なお，本号序文末に В. Ф. ミッレル，В. М. スィソエフ，Е. Д. フェリツィン，В. И. シゾーフ，Н. В. ニキーチン，А. М. パヴリノフが行った調査ルートの地図が付されることが約束されていたが，目次末尾でそれらが編集上の都合で次号へ延期される旨注されている。しかし，第14号までにこの地図はない。そのため遺跡の正確な位置が不明なものが多い。大変残念であるが，МАК の資料的価値を著しく損なっている。

Вып. V. Никольский, Михаил Васильевич. Клинообразные надписи Закавказья. Москва, О. О. Гербек, 1896. 133 стр., 33 табл., 36 см.

著者 М. В. ニコーリスキィ（1848-1917）はロシアにおけるアッシリア学の父である。1887年帝国モスクワ考古学会に東方委員会を組織し活躍した。本号のウラルトゥ碑文のほか，ラガシュ等出土のシュメール粘土板文書を出版し，古代メソポタミアの社会経済史を研究した。

1893年6月20日から9月5日，ニコーリスキィは次号の著者 А. А. イヴァノフスキィと共に旧エリヴァン県とアレクサンドロポリ県（現レニナカン方面）を中心に古代ウラルトゥ碑文を確認し写真に収め，考古学的条件を考慮して研究を行った。この調査で新たに4点の碑文が発見された。序ではウラルトゥ史と古代メソポタミ

ア史の概説とウラルトゥ碑文研究史が述べられている。調査の具体的内容は次号に譲られ，本号では24点の碑文原文(楔形文字)・翻字・露訳・注・碑文の歴史的背景を取り上げている。以下に本号と Г. А. メリキシュヴィリ (Меликишвили) の今日最もよく纒められたウラルトゥ碑文集[14]を対照する。

碑文所在地	王　名	本号番号	メリキシュヴィリ番号
Ташбурун	Menua (810-781 BC)	I	30
(現 Цолакерт)	〃	II	31
	〃	III	—
Армавир	Argišti I (781-760 BC)	IV	140
	〃	IX	137
	〃	X, XI	142
	〃	XVII	143
	〃	XXIV	136
	Sarduri II (760-730 BC)	XII	165
	〃	XIII	171
	〃	XIV	172
	〃	XX	166
	〃 (?)	XXIII	—
	Rusa III (605-590 BC)	XIX	288
Арагатц	Argišti I	VII	132
Ганлиджа	Argišti I	V	133
Сарыкамыш (Sarıkamış)	Argišti I	XXI	130
Ганли-тапа	Argišti I	XXII	139
Эйляр (現 Элар)	Argišti I	VI	131
Ордаклю (現 Лчашен)	Argišti I	VIII	134
Атамхан	Sarduri II	XVI	160
Захалу	Sarduri II	XV	161
Кёланы-Кирланы	Rusa I (730-714 BC)	XVIII	266

Г.А. メリキシュヴィリはニコーリスキィの研究を「当時ザカフカズィエのウラルトゥ碑文の知られたものすべての出版の点で模範であり，一連の文法的形態と語の意味の精査においてウラルトゥ語研究を著しく前進させた」とその意義を評価し[15]，ウラルトゥ考古学の指導者である Б. Б. ピオトロフスキィ (Пиотровский) は「彼はそれまでの不正確な碑文のコピーの修正とそれらの翻訳を付加することに成功した。この研究は，たとえテキスト翻訳が反古に帰したとはいえ今日でもその意義を失っていない」と述べ[16]，本号のウラルトゥ碑文研究上の重要性を認めている。

Вып. VI. Ивановский, Алексей Арсеньев. По Закавказью; археологические наблюдения и исследования 1893, 1894 и 1896. Москва, А. И. Мамонтов, 1911. iii, 194 стр., 16 табл., карта, 36 см.

前号で触れた A. A. イヴァノフスキィ（1866-？）はモスクワ大学の歴史文学部と物理数学部を経，同大学地理学教授とモスクワ歴史博物館人類学博物館館長となった。そして，人類学民族学方面に多数の著作を表わした。彼はモスクワ博物学人類学民族学愛好者協会の会員でもあり，その博学ぶりは C. H. ユージャコフ（Южаков）編『大百科事典（Большая энциклопедия）』に発揮された。

本号は表題のとおり 1893, 94, 96年のアルメニア地方の調査報告である。そのうち1893年は上記の M. B. ニコーリスキィと共に行ったもので，調査地域はゴクチャイ（現セヴァン）湖周辺，エレヴァン平原だった。1894年は単独でエレヴァン平原から現トルコ領カルス地方に向かい，古代ウラルトゥの都市・要塞址を調査発掘した。この2年間で前号の碑文コピーが作成された。1896年彼はエリザヴェトポリ（現アゼルバイジャン共和国西部キロヴァバード市）県南部地方の石棺墓を発掘した。また本号全体を通じて遺跡の地理的環境が詳しく述べられている。

調査の成果は，タシュブルン村東方3kmの Menua 王の碑文の所在地でウラルトゥの都市を発掘したことである。1893-94年に亘る発掘で17戸の建築址と都市東側の小要塞2ヶ所，近くの要塞址3ヶ所を明らかにした[17]。またカルス地方のサルカムシュ村とその周辺の調査で，この地方がヴァン王国時代重要な戦略地点であったと指摘している。1896年のエリザヴェトポリ県ケダベク村からカラニブラク村までの石棺墓調査では，W. ベルク（Belck）らが掘り残した墓91基を発掘し，各種青銅製品，ビーズ，土器，若干の鉄製品を得た。イヴァノフスキィは石棺墓を①板石の覆いをもち，脆い土をかぶせたもの，②周囲に石積が施されたものの2種類に分けた。結論として，彼は W. ベルクの主張する文化のドナウ川流域からの波及に反対し，両者の相違を認めたが，文化の起源については今のところ不明であると結んだ。

Б. Б. ピオトロフスキィは M. B. ニコーリスキィと共に行った彼の調査を「これは楔形文字専門家と考古学者とのはじめての共同作業であり，それは有益な成果を与えた」と評価している[18]。

Вып. VII. Христианские памятники; исследования А. С. Хаханова, Свящ. Садзагелова, Г. Церетели, В. М. Сысоева, Е. Д. Фелицина, и Г. И. Куликовского. Москва, А. И. Мамонтов, 1898. 142 стр., 23 табл., 36 см.

本号の著者は実際にはA.C.ハハーノフ，サザゲロフ司教，Г.ツェレテリ，B.M.スィソエフの4人で，Е.Д.フェリツィンとГ.И.クゥリコフスキィは図版を提供したのである。

1-68頁を担当したA.C.ハハーノフ（Хаханов〔Хаханашвили〕, Александр Соломонович. 1866-1912）はグルジアの歴史・文学・言語民族学研究家である。ラーザレフスキィ東洋諸言語学院のグルジア文学教授でグルジア語や露仏独語で研究を発表，同時に『民族学評論（Этнографическое обозрение)』等多くの雑誌に協力した[19]。

彼は1892, 93, 95年に東部グルジアのキリスト教関係遺跡調査を行った。調査地域は大カフカズ山脈東部南斜面のアラザニ川上流のテラヴィ市周辺から南東シグナヒ，現アゼルバイジャン共和国北西部のザカタルまでのカヘティア地方，次に，ティフリス郡，ゴリとドゥシェティとの間のクサニ郡（クラ川左岸支流クサニ川流域），ゴリ西南方面，アハルツィヘ郡の諸地方で，修道院・教会・寺具・碑文・写本を記録した。

69-80頁はГ.サザゲロフ=イヴェリエリ（Садзагелов-Ивериели, Георгий.）司教がクラ川左岸支流アラグヴィ川右岸アナヌリに位置する城壁を有すウスペーンスキィ大寺院を詳細に調査した報告である[20]。

81-114頁はГ.ツェレテリ（Церетели, Георгий Ефимович. 1842-1900）による西部グルジアのリオニ川左岸支流クヴィリラ川上流域の考古学調査報告である。ツェレテリはイメレティアの領主ツェレテリ家出身で，ペテルブルグ大学物理数学部を卒業後，グルジアで社会思想運動を推進した。『第一歩』『グルカン』等の小説で旧体制を批判し，『ドロエバ(時代)』誌の編集に加わり，『クヴァリ（まぐわ路)』誌を主催した。また彼はグルジアの文学・考古学・民族学研究家でもあった。本号では上記の地方の修道院・教会を調査し，碑文を対訳で発表している。

115-136頁はB.スィソエフ（Сысоев, Василий Михайлович. 1864-1933）の北カフカズ西部クバーン川上流域のキリスト教会址と墓地の調査である。彼はモスクワ大学歴史文学部を卒業後，エカテリノダール（現クラスノダール）で教師を務める傍ら，1897年クバーン地方研究愛好会を設立，«Известия»を編集した。革命後バクーに移り，1923年アゼルバイジャン研究調査会を創設，アゼルバイジャン古跡保護中央局に勤務し，当地の歴史考古学を研究した。

本号では，クバーン川上流左岸支流ボリショイ・ゼレンチュク川流域の石棺墓・岩陰墓・3基の小教会址，クバーン川とテベルダ川との合流点近くのゲオルギエフスキィ村（現オルジョニキゼフスキィ村）近郊の堡塁・教会址・石棺墓，さらにテベルダ川上流の教会址と石棺墓を調査発掘した。そしてこの地方の埋葬型式を11に分類し，また教会の類例をアブハジアに求め11-12世紀に比定した。

本号最後に編集者がЕ.Д.フェリツィンとГ.И.クゥリコフスキィ収集の十字

架石・石柱・石人35点の図版を解説している[28]。

Вып. VIII. Уварова, Прасковья Сергеевна. Могильник Северного Кавказа. Москва, А. И. Мамонтов, 1900. 381 стр., 134 табл., карта, 36 см.

本号についてはすでに触れた。MAK 中最大のヴォリュームである。ウヴァーロヴァは本号の対象地域である中央カフカズ山岳地帯に1879年第5回全露考古学会議準備委員会の調査で夫ウヴァーロフと共に訪れた。この時の収集品がウヴァーロフ・コレクションとしてモスクワ歴史博物館に収められている。

本号に記録された墓地は，オセチア南東部テーレク川からギゼリドン川までのタガウリアの Кобан, Саниба, Даргавс（本文中では Дергавс), Хуссар-Ханджак, Чми, Царпа, Балта, Казбек（カズベク遺宝), その西方フィアグドン川沿いのクルタティアの Далагкау, Ладза, Дзивгис, Корца, オセチア西部ルトハ川中流域のディゴリアのЗадалиск, Нары, Ханаз, Цах-Адаг, Лизгор, Донифарс, Камблыте, Бахайтерах, ルトハ川上流域の Нижняя Рутха, Ахсау, Махческ, Хох-Сырта, Каллахта, Фаскау, Голиат, Каминте, オセチア中南部アルドン川最上流域の Гал-Фандаг, Зарамаг, Архон, Тли, さらにチェチェン山岳部とカバルダ山岳部に及んでいる。

特にコバーン文化の名のもとになったギゼリドン川左岸ヴェルフニィ・コバーン村第2テラスの墓群は当時すでに全ヨーロッパに知られていた。1869年土地の住民 X. カヌコフ（Кануков, Хабош）はここで若干の遺物を収集し，ティフリスのカフカズ博物館へ持参した。1877年 Г. Д. フィリモノフ（Филимонов）はモスクワで開催される人類学展覧会の準備として当地へ赴き，これらの青銅品に注目し発掘を行った。この時，カズベク山直下のカズベク村でも発掘し青銅・鉄・銀製品を発見した。フィリモノフはこの結果を翌年人類学展覧会委員会議事録に掲載した。このニュースは全ヨーロッパに伝わり非常な関心を惹起した。1879年第5回全露考古学会議準備委員会は中央カフカズへ В. Б. アントノヴィチ（Антонович）を派遣した。彼は第2テラスで5基の石棺墓を発掘した。1880年ティフリス在住の F. バイエルンやドイツ人 R. フィルホウ（Virchow）[21]，フランス人 E. シャントル（Chantre）[22]もこの地を訪れた。特にシャントルは22基の石棺墓を明らかにしている。彼らは発掘品・採取品をパリのサン・ジェルマン博物館やウィーン自然史博物館に持帰り，コバーン村の名を確かなものにした。第5回全露考古学会議の結果盛り上ったカフカズ考古学ブームで登場した愛好家 К. И. オリシェフスキィ（Ольшевский），Д. И. ヴィルゥボフ（Вирубов），А. В. コマロフ（Комаров），В. И. ドルベジェフらも多量の資料を収集した。中でも，ヴラジカフカズに住み現地で発掘し墓壙を図面

に取ったオリシュフスキィは最大のコレクションをなした。コレクションはエルミタージュ博物館とモスクワ歴史博物館に所蔵されている。また，J. ド・モルガン(De Morgan)[23] や E. ド・ジチ (De Zichy) も立寄っている。しかしながらヴェルフニィ・コバーン村出土の考古学資料の大半は X. カヌコフ，Б. ゼリホフ(Дзелихов)，カバルダ領主 И. ウルスビエフ (Урусбиев) らの乱掘によるものである。X. カヌコフは600基以上もの墓を発いたといわれる。こうして，ヴェルフニィ・コバーン村を代表としてオセチアの古代墓地出土品は現在モスクワ，レニングラード，トビリシ，オルジョニキゼ，パリ，リヨン，ウィーン，ベルリンの博物館の所蔵に帰している。ウヴァーロヴァは本号でウヴァーロフ・コレクションをもとにこれらの拡散した資料を丹念に拾って記述している。

本号の評価として故 E. И. クループノフは「П. C. ウヴァーロヴァはオリジナルで豊富で様々な時代の北オセチアの考古学資料と諸墓群の優れた大部の出版物により北カフカス中央部の諸遺跡の世界的知名度を確かなものにした」と述べ[24]，中世アラン考古学の指導者 B. A. クズネツォフ (Кузнецов) は「П. C. ウヴァーロヴァの研究には当時の特徴である多くの不充分さが本来的にある。つまり，発掘の不正確な記録，資料の表面的な記述と研究，しばしば正しくない編年と出土品解釈である。にもかかわらず，その時代にとって П. C. ウヴァーロヴァの研究は疑いなく大きな前進であり，蓄積された考古学資料の総合の最初の試みであった」と価値を認めている[25]。

ところで，1979年2月6日から4月30日パリのグラン・パレで開催された "Avant les scythes : préhistoire de l'art en U. R. S. S." 展覧会でオリシェフスキィ・コレクションとシャントル・コレクションが一堂に会した。まさに，ヴェルフニィ・コバーン村第2テラス発掘史を見る思いである[26]。

Вып. IX. Москва, А. И. Мамонтов, 1904. 175 стр., 17 табл. (включ. 4 карты), 36 см.

本号には表題がない。当初予定されていた『クバーン地方考古学地図　新版』は編者 E. Д. フェリツィン (Фелицын, Евгений Дмитриевич. 1848–1903) の急逝により断念，本号を彼の追悼号に当てた。口絵にフェリツィンのチェルケスカを着た半身像を掲げている。

序文 (I–VII頁) で B. M. スィソエフがフェリツィンの略伝を述べている。彼は1871年ティフリス陸軍士官学校を卒業後，1879年クバーン地方統計委員会書記となった軍官吏である。当時すでに彼は『カフカズ』『ティフリス通報 (Тифлисский вестник)』等にクバーン地方関係論文を寄稿していた。1872–92年には『クバーン地方彙報 (Кубанские областные ведомости)』を編集した。彼はクバーン地方

を全方面から知るという目的で農村調査と考古学遺跡の記録，統計学資料の収集に力を入れた。そして，クバーン地方のほぼ全域を廻り1882年帝国モスクワ考古学会から『クバーン地方考古学地図(Археологическая карта Кубанской области)』を出版した。1888年にはクルィムスカヤ村近郊のカラゴデウアシュフ（Карагодеуашх）クルガンを発掘，前4世紀のスキタイ王族の墓を明らかにした。1892年ティフリスのカフカズ考古学委員会会長に就任した。こうした努力で彼はクバーン地方統計委員会附属考古学博物館を設立した。

本号1-86頁はフェリツィンの遺稿である。そこでは西部カフカズに見られるドルメンに関しての全体的記述と型式分類を行っている。ドルメン分布の中心地をマイコープ市以南で5ヶ所，クバーン川下流左岸地方で19ヶ所，西部カフカズ黒海沿岸ではゲレンジィクから現アルヒポ＝オシポフカまでで9ヶ所を指摘している。彼はA.C.ウヴァーロフのドルメンに関する見解に基本的には賛成したが，より詳細に5型式23区分に分類している。編年に関しては，バゴフスカヤ村のドルメンから出土したという「ローマの剣」と後3世紀のボスポロス王Rheskuporis IVのエレクトラム製コインにより後3世紀に比定した。次にコッジォフスカヤ（ベラヤ川上流カーメンナモツキィ村付近），ボゴフスカヤ（グルマイ渓谷），デグアクスカヤ（ダホフスカヤ村近郊），ツァールスカヤ（現ノヴォスヴォボードナヤ村）の4群のドルメンの記述と分布地図を示した。B.M.マルコーヴィン（Марковин）は「E.Д.フェリツィンにおいて後2-3世紀乃至『より後の時代』という地方の諸遺跡の年代が現れた。編年問題解決にとって明らかに資料を把握していなかった」と批判している[27]。この地方のドルメンは現在では前2300-2000年のマイコープ文化に編年されている。

89-169頁はB.M.スィソエフの1892年のザクバニエの考古学調査である。調査はクバーン川下流左岸支流アビン川からベラヤ川までの各流域のドルメンが対象であった。また1896年6-7月クバーン川上流域10ヶ所で墓群を発掘した。

170-175頁ではП.C.ウヴァーロヴァがカフカズのドルメンに関しての若干の補足をしている[28]。

Вып. X. Уварова, Прасковья Сергеевна. Поездка в Пшавию, Хевсуретию и Сванетию. Москва, Общество распространения полезных книг, 1904. 183, 40 стр., 46 табл., 36 см.

本号1-49頁は1895年の調査旅行の日誌である。それによると，同年7月グルジア軍用道路を南下しアナヌリからアラグヴィ川左岸支流プシャフスカヤ・アラグヴィ川に抜けティアネティ市へ向かう。市周辺を観察の後，北方プシャフスカヤ・アラグヴィ川へ向かい，川沿いにプシャヴィア地方のシュアプホ村まで遡行した。

ここからヘウスゥルスカヤ・アラグヴィ川に沿って北上し，ヘウスゥレティア地方のグゥダニ村に達した。著者はここで次のように述べている。「ヘウスゥルの女性は極めて美しい。健康で丈夫，黒髪で色浅黒く，美しい楕円形の顔と大きな輪郭，黒くはっきりとした切長で大きな愛想のよい目をしている。(中略) 私の予想が正しいかどうか知らないが，我々が別なタイプ別な特徴に気づいているようなシャティリの住民よりもさらにザポロジエのスキタイ人のタイプに近いように思われる。」(18頁) 次に大カフカズ山脈の分水嶺を越え，北流するアルグン川最上流域からグルジアと現チェチェノーイングシ自治共和国との国境のシャティリ村まで下った。帰路はヘウスゥルスカヤ・アラグヴィ川上流へ引返し，東向して峠を越えイオリ川上流域へ出，川沿いに南下，7月末ティフリスに到着した。このプシャヴィア地方とヘウスゥレティア地方でキリスト教会址・土着信仰の聖域・要塞址を記録，特に MAK 第4号で指摘したキリスト教と土着信仰の融合した教会・聖域を詳述している。

8月8日ティフリスからクタイシへ移動。そこからリオニ川を北上しその支流ロジャヌリ川を経て，ツヘニスツカリ川上流のササシ村へ抜けた。ここがレチフゥムスカヤ・スヴァネティア地方である。そこからスヴァネティア山脈を横切り，イングゥリ川最上流域のヴォリナヤ・スヴァネティア地方へ到達した。この地方には重要な福音書写本の発見されたクヴィリクとイヴリティ(Квирик и Ивлити)修道院がある(次号参照)。ここからイングゥリ川水源地方を訪れタマラ女王の娘ルスダンの城塞を見学した。次に同河をすこし下り，ドデシキリアノフスカヤ・スヴァネティアを調査した。そして再びスヴァネティア山脈を横断し山脈南斜面のダディアノフスカヤ・スヴァネティアを通り，レンテヒ市からツァゲリ，オルベリと経てクタイシに帰還した。これらスヴァネティア地方の大半の村にはキリスト教会が所在し，村々は多くの塔により防衛されている。日誌には地勢・風土・植生・民族誌的記述が多く盛込まれている。この調査の結果を「教会と聖域」(50-78頁)，「十字架」(79-90頁)，「エナメル製品」(91-100頁)，「金属性イコン」(101-119頁)，「絵画によるイコン」(120-124頁)，その他 (125-162頁) の順に纏めている。最後にスヴァネティアで得られた資料の一覧を付している。

本号巻末には頁別立で A. C. ハハーノフが「スヴァネティアの福音書写本」と題して，ウヴァーロヴァのスヴァネティア調査で発見された8点のグルジア語訳福音書写本と33点の他の写本，その書込み等を紹介している。

Вып. XI. Коридетское евангелие. Москва, Г. Лисснер и Д. Собко, 1907. xvi, 48 стр., 50 табл., 36 см.

前号スヴァネティア地方調査の中で指摘したクヴィリクとイヴリティ{本号ではキリクとウリタ (Кирик и Улита)} 修道院で1853年 И. А. バルトロメイ (Барто-

ломей）は古いギリシア語福音書写本（Codex Koridethianus）を発見した。写本はクタイシ近郊のゲラティ修道院にもたらされ，1901年にはティフリスのシオニ古物収蔵館に移管された。1904年その研究と出版が決定され，И. Е. エウセエフ（Евсеев, Иван Евсеевич.）が担当し H. フォン・ゾーデン（Von Soden, Hermann. 1852–1914）が本号のために独語序文を書いた。

フォン・ゾーデンはテュービンゲン大学に学び，1893年ベルリン大学新約学教授となった。聖書神学者で新約テキスト批評家，またベルリンのエルサレム教会牧師をも勤めた。彼の研究は新約聖書の写本を収集し，福音書，使徒行伝・書簡，新約聖書全体という分類を作り独自の番号を与えた[29]。彼は Die Schriften des Neuen Testaments in ihrer älteste erreichbaren Textgestalt, Bd. 1–2. Berlin, 1902–1913. でこの Codex Koridethianus に 05 という番号を与えている。本号序文（VII–XVI 頁）では Codex Bezae Cantabrigiensis（フォンゾーデンの番号 δ 5；現D）と1890年 H. C. ホスキア（Hoskier）により発表されたテキスト（フォン・ゾーデンの番号 133）とこの写本（現 Θ）とを比較しこれらの親縁関係を実証，後 300 年頃小アジアのカエサリアでパムピオスとエウセビオスが編集した原初的形態をより正しく伝えるテキストに近いものであると結論している。

1–48頁では И. Е. エウセエフがこの写本を詳説し，Codex Bezae Cantabrigiensis との比較を四福音書全体に渡って行っている。写本は羊皮紙249葉，28行2段組，寸法29×24cm，マタイ伝の最初の部分が欠け，マルコ，ルカ，ヨハネの各伝の前に目次と図が挿入されている。50枚の図版は写本中最も古い（6世紀）西方系統のマルコ伝全文と目次である。他3福音書は東方系統に属しその後の時代に比定されている[30]。

Вып. XII. Такайшвили[31], Евфиний Семенович. Христианские памятники; экскурсия Е. Такайшвили 1902 г. Москва, Г. Лисснер и Д. Собко, 1909. xii, 162 стр., 25 табл., 36 см.

Е. С. タカイシュヴィリ（1863–1953）はグルジア埋蔵文化財研究の父である。1887年ペテルブルグ大学歴史文学部を卒業後，グルジアでギムナジウム教師を勤める傍ら，1889年アルマズニツィへの名で知られるムツヘタの古代都市，1894年青銅器時代後期からウラルトウ時代のヴォルナクスキィ墓地，西部グルジアのヴァニ[32]，1896年ゴリ近郊のスクラとトリアレティ，1902年古代都市サラパニス近くのボリ，1908年有名なアハルツィヘ遺宝とアハルカラキ等を調査発掘した。1901年には帝国モスクワ考古学会カフカズ支部創設に加わり，後にはトビリシ大学に考古学講座を開設した。1921年彼は学問的目的と政治的理由でパリへ亡命，第2次大戦終了後の1945年帰国して，トビリシ大学のグルジア史講座の教授に就任した。彼はグルジア

露仏英語で300点近い論文を発表した[33]。

前書き（V–XII頁）によれば1902年7月の調査地域はグルジア西南部アハルツィヘとアハルカラキ地方，現トルコ領カルス地方北部のグルジア国境近くのチィルドィル湖周辺とその西方アルダハン（露 Ардаган. トルコ語 Ardahan）地区であり，そこのキリスト教会址・要塞址の調査を目的とした。

3–17頁ではアハルツィヘ地区13ヶ所の修道院・教会・要塞址を調査，教会壁のレリーフや碑文を挙げている。

18–44頁ではアハルカラキ郡の同様な調査を報告している。中でもアハルカラキ南西12kmに位置するクゥムゥド・カテドラルはその壁に残された多数の碑文により重要である。教会は964年アブハジア王レオンⅢ世代に主教イオアンにより創建された。主教は当地出身でイェルサレムとシナイへ旅し，981年の記録に言及されている。11世紀バグラトⅣの母マリア王妃は土地の人ゾシムの協力で教会南側に別棟を増築した。ゾシム自身はイェルサレム近郊の十字架修道院に残るその時代の写本『エジプト人聖マカリオスの教書』に言及されている。14世紀初頭別のゾシムが教会を修復し今日に伝えた。

45–68頁ではカルス地方チィルドィル湖周辺の教会15ヶ所が記録されている。

69–79頁はアルダハン地区の記述である。

80–117頁はその西方オリティ地区の教会址について語る。ここで特に重要なのはバナ教会址である。タカイシュヴィリはこの教会を1902年，1907年の2度調査を行い，1907年には A. H. カリティンが平面図と復元図を作成し直した。バナ教会はプラン円形で[34]，アルメニアのエチミアジンの聖グリゴル教会（ズヴァルトノツ教会），総主教ネルセスⅢの教会[35]，アニのガギク教会に類似している。様式的にはビザンツ式だが新しい要素の加わったもので，その起源をアジャリアのチョロフ川流域にネルセス主教（後，総主教）が建造したイシュハン教会に求めている。彼はバナ教会を10–11世紀に比定している。これに対し，Г. チュビナシュヴィリ（Чубинашвили）は7世紀に比定した[36]。

117–132頁はビザンツ皇帝ロマノフ・アルギロスの姪，バグラトⅣ（1027–1072）に降嫁したエレーナがグルジアに持参したキリストのイコンをめぐる問題を扱っている。この問題解決のために，エレーナに同伴した懺悔聴問僧ガルセヴァニシュヴィリに起源するガルセヴァニシュヴィリ家の歴史を綴った1717–18年ヴァフタンギⅥ乃至司祭長イアセ・ガルセヴァニシュヴィリによる法令全文を原文と露訳を付けて引用している。結論として，問題となった今に伝わるイコンは15世紀頃からエレーナに由来するという伝説に包まれていったものである。

132–162頁ではゼモニチャラ教会に保管されているヴァフタンギⅥの娘アヌカ皇女の婚資の一部を紹介している。

Вып. XIII. Москва, Г. Лисснер и Д. Собко, 1916. v, 234 стр., 40 табл., 36 см.

本号には表題がない。「編集部より」を見ると，本号が1907-08年 B.M.スィソエフがアルメニアで行った調査資料をもとにП.С.ウヴァーロヴァとХ.И.クチュク=イオアネソフにより編集された旨が述べられている。そして，1907年の調査（1-72頁），1908年の調査（73-196頁），碑文索引（199-243頁）の3部構成となっている。なお，アルメニア語碑文はХ.И.クチュク=イオアネソフが担当した。

1907年の調査地域は旧エリヴァン県東部のガルニチャイ（現アザト）川中上流地方である。特にガルニチャイ川右岸支流上流域のアイリヴァンク修道院とガルニチャイ川右岸のガルニ村周辺の教会・修道院址の調査が主であった。アイリヴァンク（ケガルト）修道院はガルニチャイ川右岸支流の渓谷北斜面に位置する。修道院全体のプランは方形で，南・東側に石壁を有し，北側は岩壁である。修道院には6基の大建築と10基の小建築が営まれている。そのうち2基の大建築（聖グルゴル教会と僧房）のみが地上に現れ，他すべては岩壁内深くに掘り込まれている。岩壁内の建造物は，聖母教会，ハフバク家のバサクの息子プロシュ侯が造営した僧房，その上層を占めるプロシュの息子パパクとその妻ルゥズゥカンにより建立された大僧房および5ヶ所の小礼拝堂である。また，修道院門前には聖グリゴル礼拝堂がある。アイリヴァンク修道院とその外側の聖グリゴル礼拝堂とに残る碑文は全部で115，うち65は解読されている。最古のものは聖グリゴル教会南側外壁の1156年の碑文と聖グリゴル礼拝堂の12-13世紀初頭のものである。これらから判明する修道院の歴史は，1215年隠者パルセフが主要な建物を造営し，1283年プロシュが僧房を開き，1288年息子パパクが岩壁内上層に大僧房を増築した。修道院最盛期の13世紀はムハルグルゼリゼ家のサルギス，ザハレ，アタベギ=イヴァネ3兄弟が活躍した時代で，プロシュはこのムハルグルゼリゼ家の土地管理人であった。

ガルニ村東方3kmに位置するアメナ=プルイチ（救世主）教会とアフチョツ=ヴァンク修道院は大部分が13世紀に創建された。アイリヴァンク修道院の南7kmのイリヴジャ村から東方2kmの山の南斜面の聖ステパノス修道院は1212年上記のイヴァネが息子アバカの健康を祈り造営，1217年アベル師が完成させたものである。

1908年の調査はエレヴァン南方40kmのアラクス川左岸のホル=ヴィラブ修道院（17世紀）と，アラクス川左岸支流アルバチャイ川中上流とその支流アラゲスチャイ（現エヘギス）川流域の修道院・教会址を記録した。アイサスゥ村の3教会と僧房からなる建築複合体は13-14世紀オルベリャン家のタルサイチとその息子スィウニクの総主教ステパノスの時代と，16-17世紀アルメニア全体が活気を取戻した時期に繁栄した。また，ホシャ=ヴァンク修道院はバグラティド王朝のアニ王ガギクⅡ代（11世紀前半）にヴァルディク師が創建した。ここの聖ヨハネ教会，聖オヴァネス教

会，聖母教会はアルメニア美術史上重要である。

アルパチャイ川中流アマグゥ村から1.5kmに位置するノラヴァンク修道院は地方史資料として極めて重要である。修道院は塀に囲まれ，北壁近くの洗礼者ヨハネ教会・大僧房・スムバト王廟，東壁近くの2層造りの第2教会からなり，さらに修道院の外側東方に小礼拝堂があった。修道院全体で85以上の碑文が認められた。1221年オルベリャン家のリパリトⅥが洗礼者ヨハネ教会を創建，1261年息子スムバトが修復した。建築史上興味深い僧房にはオルベリャン家代々の墓碑が並び史料的価値が高い。洗礼者ヨハネ教会北側のスムバト王廟は兄スムバト侯（-1273）のためにタルサイチにより1275年建立された。第2教会はタルサイチの孫ブゥルテルとその妻ヴァハフ，彼らの子ベシケンとイヴァネにより1339年建設された。小礼拝堂はタルサイチの治世（13世紀末）に主教サルギスが建造したものである。ノラヴァンク修道院はオルベリャン家の繁栄[37]のもとで栄えた13-14世紀のアルメニア芸術の代表である。

巻末の碑文に対する人名・地名・編年索引と年号のない碑文索引その他は本号にアルメニア語碑文集[38]としての役割を付加している。

Вып. XIV. Адышское евангелие. 200 фототипоческих таблиц и предисловие Е. С. Такайшвили. Москва, Г. Лисснер и Д. Собко, 1916. 24 стр., 200 табл., 36 см.

MAK の最終号となった本号はスヴァネティア地方に保存されていたグルジア語訳四福音書写本中最も重要なアディシィ福音書の写真版復刻である。

MAK 第10号の П. С. ウヴァーロヴァのスヴァネティア地方の調査で彼女は1895年8月6日（露暦）ヴォリナヤ・スヴァネティネティアのアディシ=チャラ川の渓谷に位置するアディシィ村を訪問した[39]。村の救世主教会にこの福音書写本が保存されており，ウヴァーロヴァはその一部を写真撮影し第10号で写真と共に略述した[40]。A. C. ハハーノフは同号の「スヴァネティアの福音書写本」と題する附録の冒頭で，スヴァネティア地方で最も重要な福音書写本としてこれをより詳細に論じた[41]。彼はそこで本福音書の由来と書誌的記述，特に奥付けを翻刻し，写本年次を897年と同定したが，そこに見られるグルジア紀元と世界開闢紀元による年次の不一致を指摘した。しかしながら，予定されていた全巻刊行を見ることなく彼は1912年病没した。

ハハーノフとは別に E. C. タカイシュヴィリは MAK 第10号出版の直前，写本の最初の発見者であるアディシィ村の教会管区長ヴィッサリオン・ニジァラゼ（Виссарион Нижарадзе[42]）の長年反古同然になっていた写本その他に関する論文を『モアムベ（Моамбэ）』誌第9号へ掲載するよう指示した。さらに1910年夏スヴァ

ネティア調査の際全巻を写真に収めていた。そして，ハハーノフ亡き後福音書写本の研究を引継ぎ本号の刊行を進めたのである。

アドィシィ福音書は38×32cm，393葉[43]，羊皮紙に2段組17行，文字は黒色インクで大きく書かれたグルジア教会文字，数箇所に朱が入れられている。皮表紙表面には銀製透彫りの十字架が取付けられ，裏面は銀製釘で装飾されているが，これは奥付けで言及される補祭ミカエルになる装幀ではない。後代今日に伝わる装幀が行われるに際し綴じ直されている。

巻頭には，9世紀当時の教会建築のプランを表わす十字形とその四隅に4人の福音者の半身像が描かれている。第2葉表面には福音を綴るマルコ座像，同葉裏面にはルカとヨハネの立像がある。ルカは有髭，ヨハネは髭のない若者で特徴的である。第3－5葉に5つの対観表が表わされ，そのアーチはコリント式の柱頭・柱座を共なう柱で支えられている。第5葉裏面は最古の形式の祭壇をもつ4柱で支えられた教会堂を表現する。

各福音伝の欠落章・行はマタイ伝では IV, 25；V, 4–12, 16–20，マルコ伝では XIV, 71, 72；XV, 1–18, 19 初め；XVI, 9–20，ルカ伝では VI, 41–49；XIX, 9–14；XX, 36–43；XXI, 28–38；XXII, 1–15，ヨハネ伝では VII, 53；VIII, 1–12[44]である。

ヨハネ伝末尾の第386葉裏面にマルコ伝 XIV, 33–37 が朱書され，しかもそこでは「福音書」がギリシア語からの借用語 ევანგელიონ となり，通常のグルジア語 სახარება ではない。また，テキストも本文の同箇所と一致せず注目に価する。この書込みの下から写本自体の奥付けが始まるのであるが，最初の教会文字小文字の26行の書込みは後代のもので，本来の奥付けを削り取りその上に書いたものである。写本の際の奥付けはしかしながら復元されえる。奥付けは2人の手になり，初めが写字生である補祭ミカエル，後が写本の依頼者であるソフロンのものである。

前述したハハーノフの問題提起に関しタカイシュヴィリはその解決を行っている。つまり，ハハーノフがミカエルの奥付で読んだ Ჯ Ყ（世界開闢紀元6800年）は Ჯ Ფ（同紀元6500年）と読むべきで，その後に Ლ が続いていたのである（同紀元6501年）。グルジアでは世界開闢からキリスト生誕までを5604年としていることから6501－5604＝897年となり，ミカエルの奥付のコロニコン897年と一致するのである。

アドィシィ福音書はチォロフ川沿岸のシャトベルディ修道院で897年第3代院長ソフロンの命で補祭ミカエルが筆写した。後代の奥付けによれば，多分14世紀後半オスマン＝トルコの勢力が同地方に及ぶに際し，バツーミ地方クラルジェティ出身のジゥマティ修道院院長ニコライにより北のグリア地方へ移され，その後，なんらかの理由でスヴァネティアのアドィシィ村へ達したのである。

IV おわりに

帝国モスクワ考古学会が行ったカフカズ調査の地域はクバーン川流域，北西カフカズ黒海沿岸部，中央カフルズ，アブハジア，南オセチアを除くグルジア全域，アジャリア，中部アルメニア，現トルコ領北東部，アゼルバイジャンの一部に及ぶ。これらの地域はほぼ共通してキリスト教文化の洗礼を受けたことがある。カフカズの残りの地域も当時調査が開始されていた。そして今日，カフカズ全域が隈なく調査され夥しい報告書が大都市ばかりでなく地方都市からも出版されている。

今日 MAK の多くの部分は修正され，さらに多くの資料の蓄積が個々の著者の考察を深めている。従って，これまで紹介した内容がそのまま現代に通じるものではない。しかし，MAK が有する先駆性は否定することができず，今日のカフカズ考古学の盛況ぶりも実はそれに基づくところ大と言うことができよう。

本稿がカフカズの古代文化の理解に少しでも寄与できれば幸いである。

（1980年２月11日第一稿，1980年５月18日改稿）

注

1) 角田文衛「ウヴーロフ伯夫妻と露西亜考古学」『増補古代北方文化の研究』新時代社 1971.9 p. 301–316。同氏「ヨーロッパ」『世界考古学事典 下』平凡社 1972.2 p. 1466。

2) 会議は第１回（モスクワ，1867）から第15回（ノヴゴロド，1911）まで行われ，«Труды археологических съездов», т. 1–37 (1871–1916) を発表した。

3) Крупнов, Е. И. Древняя история Северного Кавказа. Москва, 1960. стр. 30.

4) コスタ・ヘタグロフ著，加藤九祚訳・解説「『オーソバ』—オセチア人の民族学的概説—」『国立民族学博物館研究報告』vol. 2, No. 4. 1977. 12 p. 829–830 に言及がある。なお，«Осетинские этюды» のオセチア語文法の部分は Миллер, В. Язык осетин. Москва-Ленинград, 1962. として復刻されている。

5) Миллер, В. Там же. стр. 1–8 (От редактора В. Абаева). なお，本稿で述べる伝記事項は次の参考書に基づいた。Большая советская энциклопедия, 1 изд., т. 1–65. Москва, 1926–47; Тоже, 2 изд., т. 1–52. Москва, 1949–60; Тоже, 3 изд., т. 1–30. Москва, 1970–78; Большая энциклопедия, под ред. С. Н. Южакова, т. 1–22. Санкт-Петербург, 1904–09; Советская историческая энциклопедия, т. 1–16. Москва, 1961–1976.

6) Крупнов, Е. И. Средневековая Ингушетия. Москва, 1971. стр. 106, примечания 106.

7) Мужухоев, М. Б. Храм Алби-Ерды. Советская археология, 1979, No. 1. стр. 275–280.
8) См.: Крупнов, Е. И. Средневековая Ингушетия. стр. 74.
9) Крупнов, Е. И. Древняя история Северного Кавказа. стр. 32.
10) См.: Марковин, В. И. Дольмены Западного Кавказа. Москва, 1978. стр. 6.
11) И. Т. Кругликова は古代ボスポロス王国の都市ゴルギッピアの参考文献として挙げている。Кругликова, И. Т. Синдская гавань, Горгиппия, Анапа. Москва, 1977. стр. 86.
12) МАК, вып. 13. стр. 1.
13) См.: Иессен, А. А. Археологические памятники Кабардино-Балкарии (Значение древних памятников Республики). Материалы и исследования по археологии СССР, No. 3. Москва-Ленинград, 1941. табл. IX, X.
14) Меликишвили, Г. А. Урартские клинообразные надписи. Москва, 1960.
15) Там же. стр. 26.
16) Пиотровский, Б. Б. Ванское царство. Москва, 1959. стр. 13.
17) この中には Ганли-тапа（アルメニア語では Арин-берд）丘が含まれている。1950年 К. Л. Оганесян が保存工事を開始，翌年カルミル=ブルゥル調査隊が工事を継続した。См.: Лосева, И. М. Раскопки цитадели Урартского города Ирпуни. Краткие сообщения Института истории материальной культуры, вып. 58. 1955. стр. 45–52.
18) Пиотровскии, Б. Б. Указ. соч., стр. 13.
19) М. О. コスヴェンは彼の民族学研究を高く評価している。См.: Косвен, М. О. Материалы по истории этнографического изучения Кавказа в русской науке, ч. III. Кавказский этнографический сборник, т. III. Москва, 1962. стр. 195.
20) См.: Закарая, П. П. Фортификационные сооружения Шида-Картли. Краткие сообщения Института истории материальной культуры, вып. XLVI. 1952. стр. 127–128; рис. 41, 42.
21) Virchow, R. Das Gräberfeld von Koban im Lande der Osseten. Berlin, 1883.
22) Chantre, E. Recherches antropologiques dans le Caucase, t. I–IV. Paris-Lyon, 1885–1887.
23) De Morgan, J. Mission scientifiques au Caucase. Études archeologiques et historiques, t. I, II. Paris, 1889.
24) Крупнов, Е. И. Древняя история Северного Кавказа. стр. 30–31.
25) Кузнецов, В. А. Аланские племена Северного Кавказа. Материалы и исследования по археологии СССР, No. 106. Москва, 1962. стр. 8.
26) Avant les scythes: préhistoire de l'art en U. R. S. S. (catalogue). Paris, 1979.
27) Марковин, В. И. Указ. соч., стр. 6.
28) 当時ドルメンはザカフカズィエでは発見されていなかったためウヴァーロ

ヴァはその存在を否定していた。しかし今日ではアブハジアでも発見されている。Марковин, В. И. Там же. стр. 6–8. なお В. И. マルコーヴィンのこの研究は本号を基本資料の一つとしている。

29) 『キリスト教大事典』 教文館 昭和36. 6. p. 668; New Catholic encyclopedia, vol. XIII. Washington D. C., 1967. p. 411.

30) The new encyclopædia Britannica, 15 th ed., macropædia vol. 2. Chicago, 1974. p. 943–944.

31) 第12号本文表紙では Токайшвили であり，序文末尾では Такайшвили となっている。恐らく前者は誤植であろう。

32) Лордкипанидзе, О. Ванское городище (Раскопки, История, Проблемы). Вани I; археологические раскопки 1947–1969. Тбилиси, 1972. стр. 44; Хоштариа, Н. В. История археологического изучения Вани. Там же. стр. 84–86 (на грузин. языке).

33) Ломтатидзе, Г. А. Евфимий Семенович Такайшвили. Советская археология, 1964, No. 3. стр. 165–169.

34) См.: Амиранашвили, Ш. Я. История грузинского искусства, т. I. Москва, 1950. стр. 150–153; табл. 2, 46–50.

35) См.: Арутюнян, В. М. Эчмиадзин. Ереван, 1978. стр. 30–32; Burney, C. and Lang, D. M. The peoples of the hills: ancient Ararat and Caucasus. London, 1971. p. 256–257.

36) Tschubinaschwili, Georg. Georgia, art of. Encyclopedia of world art, vol. VI. New York, 1962. col. 141; fig. 143a; pl. 113.; См.: Амиранашвили, Ш. Я. Указ. соч., стр. 151–153; 1967年8月8–27日タオ地方を調査した N. und D. Gutschow はバナ教会の創建に関して「教会はクヴィリケ主教の時代にアダルナセⅢ（881–923）の命令で建立された」と述べている。Gutschow, N. und D. Kirchen in Tao-Klardjethien in der nordöstlichen Türkei. Archaeologische Mitteillungen aus Iran, Neue Folge Bd. 4. Berlin, 1971. S. 240. しかし，本稿の筆者はこの史料を寡聞にして知らない。また，N. und D. Gutschow は最近のバナ教会址及びタオ地方の他の教会址の写真を掲載している（Taf. 41–45)。

37) 13–14世紀のオルベリャン家の歴史については，北川誠一「モンゴル帝国の北西イラン支配とオルベリヤン家の台頭」『北海道大学文学部紀要』26–2 昭和53. 3. p. 51–112 が詳しい。本号のリパリトⅥは北川氏の「スィウニクーオルベリヤン家系図」（同上 p. 111）の Liparit I である。またスムバトの没年に関しては，F. Justi. Iranisches Namenbuch. Marburg, 1895 (Repr. Hildesheim, 1963). S. 446 の Orpelier 家系図では1263年乃至1273年となっていたが，北川氏は上記論文で1272年であることを実証されている（p. 70)。

38) 北川誠一 「13–15世紀のアルメニア語史料」『史朋』第6号 1977. 4. p. 12–14 参照。

39) МАК, вып. X. стр. 38. ここでは Адиши となっている。

40) Там же. стр. 77, 148–149, 174.

41) Там же. 後付け стр. 1–9.

42) Там же. 後付け стр. 1 では Нижерадзе となっている。

43) Там же. 後付け стр. 1 では 394葉。

44) ヨハネ伝 Ⅷ, 1–12 はグルジア語訳福音書ではギオルギ・ムタツミンデリ(–1160) がギリシア語福音書に基づいて再校訂するまで欠如していた。

付記：本稿執筆中次の文献の存在を知った。

Императорское Московское археологическое общество в первое пятидесятилетие его существования (1864–1914 гг.), т. 2. Биографический словарь членов Общества. Москва, 1915.

しかし，本稿では参照することができなかった。